

研究論文

マンガ読解時にコマ間でなされている推論に関する検討

吉田 佐治子¹⁾

What We Infer Between KOMAs When We Read Comic ?

Sachiko YOSHIDA

マンガの読解時に、読み手はコマとコマとの連なりからどのようなことを読み取るのかについて検討した。大学生を対象に、一度に呈示するコマの数や内容を変えて、ある出来事が「あったと思われる程度」について回答を求めた。その結果、明示されている情報や読み手のもっている様々な知識にもとづき、“描かれていない”ことまで読み取れることが明らかになった。読み手はコマとコマとをつなげて一貫した物語を読みとろうとしており、これらは、文章理解における橋渡し推論、精緻化推論にあたるものと考えられる。

¹⁾ 摂南大学

はじめに

マンガはコマからできている。マンガをマンガたらしめているのは、コマであるといってもよいだろう。そして多くの場合、いくつかのコマが連なることによって物語を紡いでいる。マンガの読み手は、それらのコマとコマとをつなぎ合わせながら、物語を読み取っていく。

コマとコマとをつなぎ合わせながら物語を読み取るということは、コマとコマとの間を読むということである。多くの場合、コマとコマとの間には空白があるが、この空白を夏目（1995）は「間白」と呼ぶ。間白を読むことで、コマとコマとが結びつき、単独のコマでは持ち得ない新しい意味が生まれる。マクラウド（1998）は、これを補完で説明し、読み手と作者とが協力することによって物語が進行するとしている。より読み手側の立場を協調したのは、石子（1989）、村上（1989）などである。村上（1989）は、どのように解釈し、どのような意味をみつけるかは読者の自由であるとし、石子（1989）は、マンガがわかるかわからないか、おもしろいかおもしろくないかは、コマとコマとをつなぐことができるかできないかに左右されるものであり、「連続マンガの面白さの活性は、肉眼では見えない」と述べる。つまり、読み手が参加することで始めて、マンガはマンガとして完成するのだといえよう。

マンガを読む上で、コマとコマとをつなぐ力が必要だということは、中澤・中澤（1993）や中澤（2004）、吉田（2016）でも確認されている。中澤・中澤（1993）は、年長幼児から中学2年生までを対象に「漫画理解テスト」を実施し、「漫画は『漫画読解力』と『漫画文脈理解力』によって理解され」、両者の間には正の相関があることが明らかにした。ここでいう「漫画読解力」とはマンガの表現技法の理解とストーリー理解に関するもので、コマに描かれている表現を理解し、それをもとにマンガの物語を読み取ることであり、「漫画文脈理解力」は個々の絵の理解や、コマとコマとの間の飛躍に気づいたり、それを適切に埋め合わせる能力である。中澤（2004）は、中澤・中澤（1993）で用いられたテストを改変したものをを用い、対象を小学生、青年、成人にまで広げた調査を行い、マンガを読み取るためにはコマ理解リテラシーと文脈理解リテラシーとが必要であることが示した。吉田（2016）では、大学生を対象に6種類の課題を用いてマンガを読むために必要な力・技能を検討し、「呈示された表現から多くの情報を読み取る力」「読み取った情報を元に推測や解釈、判断をする力」「情報を正しく読み取る力」がマンガを読むのに必要とされること、さらに「コマとコマとをつなぐ力」は「マンガの読解力」の根幹ではないかと示唆している。

何も描かれていない空白に何をを読み取るのか。間白で隔てられたコマとコマとをどのようにつなぐのか。おそらくそこには、何らかの推論が働いていると考えられる。

本研究の目的は、マンガの読み手が、コマとコマとの連なりからどのようなことを、どのようなことを手がかりとして読み取っているのか、その一端を明らかにすることである。

予 備 調 査

目的

予備調査は、本調査で用いる材料の並べ方や質問項目を検討することを目的とする。

方法

【調査対象者】大学生 45名

【材料】4枚の画像からなる組を2種類用意した（材料1，材料2とする）。材料1は，4コマで完結するマンガをそのまま用い，もとのコマの並び方の順に，各画像をA，B，C，Dとした（以下，それぞれ〈1A〉〈1B〉〈1C〉〈1D〉とする）。画像の内容は，〈1A〉「女性が男性（カール）に飲酒運転をしないようにいい，男性が「わかってるよ」と答える」，〈1B〉「Aの男性がハンドルを握りながら缶ビールを飲んでいる」，〈1C〉「車が木に衝突している」，〈1D〉「カールの墓」であった。材料2は，ストーリーマンガの1話から連続した4コマを抜き出したものであり，材料1と同じくもとのコマの並び方の順に，各画像をA，B，C，Dとした（以下，それぞれ〈2A〉〈2B〉〈2C〉〈2D〉とする）。画像の内容は，〈2A〉「白衣を着た男性が右手に何かを抱え，背中を丸めて，廊下を歩いている後ろ姿。廊下の右側には窓が，左側には扉と室名札がある」，〈2B〉「『1年3組』と書かれている室名札」，〈2C〉「『ガラ』という擬音語と敷居を跨いだ男性の右足」，〈2D〉「落下する黒板消し」であった。

【手続き】材料ごとに，1枚の用紙に4枚の画像を2枚ずつ2列に並べ，その下に2つの問いを置いた。問1では，4枚の画像を時系列に沿って並べることを，問2では，どのようなことが起こったのか，自由に記述することを求めた。なお，画像の位置についてはカウンターバランスをとった。調査対象者には，2種類の材料ともを呈示したが，半数の対象者には材料1から，半数の対象者には材料2から呈示した。

結果

1. 時系列に沿った並べ替え

画像を時系列に沿って並べたときの各画像の位置と，その並べ方をした人数を表1に示す。なお，材料2については，無回答の1名を分析から除いた。

両材料とも，もとのコマの並び方，すなわち，〔〈A〉→〈B〉→〈C〉→〈D〉〕と並べ替えたものが8割以上を占めていた。材料1においては，すべての調査対象者が〔〈1B〉→〈1C〉〕と並べ，その後に〈1D〉を置く者が9割近くにのぼった。〈1A〉と〔〈1B〉→〈1C〉〕との関係では，〔〈1A〉→〈1B〉→〈1C〉〕と並べた者が9割以上であり，〈1A〉と〈1D〉との関係では，8割以上の者が〈1A〉を先にしていた。材料2では，並べ方のバリエーションが材料1よりも多かったが，〔〈2A〉→〈2B〉→〈2C〉→〈2D〉〕と並べた者は材料1よりも多かった。2枚の画像の関係では，すべての調査者が〈2C〉の後に〈2D〉を置いていたほかにも，〈2A〉より先に〈2B〉を置く者が一定数（約1割強）いた以外は，すべての組み合わせで9割以上の者がもとのコマの並び順と同じ並べ方をしていた。

2. どのようなことが起こったのか

表1 時系列に沿った並べ替え

材料1	(人)	(%)
A → B → C → D	37	82.2
B → C → A → D	1	2.2
B → C → D → A	2	4.4
D → A → B → C	5	11.1

材料2	(人)	(%)
A → B → C → D	37	84.1
A → C → B → D	1	2.3
A → C → D → B	1	2.3
B → A → C → D	3	6.8
B → C → D → A	1	2.3
C → D → B → A	1	2.3

【材料1】回答のほとんどは、「飲酒運転をしないように注意されたのに飲酒運転をしてしまい、事故を起こして死亡した」という内容のものであった。これ以外には、「この墓は……」という回想型が3件で、これはすべて〔〈1D〉→〈1A〉→〈1B〉→〈1C〉〕という並べ方であった。また、〔〈1B〉→〈1C〉→〈1D〉→〈1A〉〕で「飲酒運転で事故死した後、生前注意されたことを思い出している」と「父親が飲酒運転で亡くなったので、息子に注意している」とが、それぞれ1件あった。

【材料2】回答のほとんどは、「教員が1年3組の教室に入ったときに、上から黒板消しが落ちてきた」という内容のものであった。この内容に「教員の頭がチョークで真っ白になった」という旨のことが付け加えられているものが、〔〈2A〉→〈2B〉→〈2C〉→〈2D〉〕で2件、「生徒からの嫌がらせで教室に行きたくない教員」という旨のことが付け加えられているものが〔〈2A〉→〈2C〉→〈2B〉→〈2D〉〕で1件あった。これ以外では、「扉を開けたらいたずらに引かなかった教員が1年3組の授業を放棄して扉を開けて帰った」が〔〈2C〉→〈2D〉→〈2B〉→〈2A〉〕で1件、「教員が怒って帰る」が〔〈2B〉→〈2C〉→〈2D〉→〈2A〉〕で1件あった。

考察

材料1、材料2とも、大多数の調査対象者が同じ並べ替えをしており、さらには異なる並べ方であっても、多くは同じ解釈をしていたことから、本調査の材料としてこの2材料を用いるのは適当だといえよう。また、少数の異なる解釈の場合も、“核となる出来事”，すなわち、材料1の場合は「飲酒運転をして事故死した」こと、材料2の場合は「教員が“黒板消し落とし”に引っかけた」ことは共通している。

問2の「どのようなことが起こったのか」への自由記述での回答には、上記の“核となる出来事”の他に、細部の描写がされているものもあった。例えば、材料1の、注意をしている女性と注意されている男性との関係や、材料2の「生徒からの嫌がらせで教室に行きたくない教員」などである。こうした記述は、画像をどこまで読むかに関わっており、“核となる出来事”を見出すには必要ではない情報ではあるが、物語を理解し味わうという点では重要な情報である。こうした、いわば“周辺情報”も、あくまでも呈示された画像やその連なりによって読み取られるものであり、何をどこまで読めるのかということは、私たちがマンガを読む際に大きな影響をもつであろう。

以上のことを踏まえ、本調査を行う。

調 査

目的

本調査の目的は、複数の画像の連なりから読み手はどのようなことを読み取るのか、またその際どのようなことを手がかりとして利用するのかを検討することである。

方法

【調査対象者】大学生 130名

【材料】予備調査で得られた結果から、材料1, 2をそのまま用いることとした。4枚の画像の並べ方については、それぞれ〔〈A〉→〈B〉→〈C〉→〈D〉〕を基準として〈A〉〈D〉を固定し、〈B〉と〈C〉を使用するか否かで4条件とした。すなわち、条件1は〔〈A〉→〈B〉→〈C〉→〈D〉〕、条件2は〔〈A〉→〈B〉→〈D〉〕、条件3は〔〈A〉→〈C〉→〈D〉〕、条件4は〔〈A〉→〈D〉〕であった。

1つの材料につき、3枚の用紙からなる調査票を作成した。1枚目には1条件の画像を縦に並べ、次の頁でその画像に関する20の出来事(表2)に対して、そのようなことが「あったと思われる程度」を4件法(絶対にあった～絶対になかった)で尋ね、3枚目では前頁の質問項目以外で「あったと思われる」出来事についての自由記述と、マンガらしさの判定(4件法)とその理由を求めた。材料については対象者内、条件については対象者間とし、呈示順序はカウンターバランスをとった。なお、本稿では分析の対象とはしないが、調査対象者のマンガに対する経験を尋ねる調査も同時に行った。

予備調査も含め、本研究は摂南大学医療研究倫理審査委員会の承認を受けた(承認番号2014-051)。

結果

【出来事の「あったと思われる」程度】

ある出来事が「あったと思われる」程度についての回答と分散分析の結果を表2に示す。

材料1において、条件間で有意差があったのは、「カールは自動車で出かけた」($F(3,126)=4.25, p<.01$)、「カールは自動車を運転した」($F(3,125)=2.72, p<.05$)、「カールは約束に遅れそうになった」($F(3,126)=7.35, p<.01$)、「カールはビデオをみた」($F(3,126)=2.94, p<.05$)、「カールはビールを買った」($F(3,126)=9.50, p<.01$)、「カールはビールを飲んだ」($F(3,126)=36.15, p<.01$)、「カールは自動車事故を起こした」($F(3,125)=7.24, p<.01$)、「カールは飲酒運転をした」($F(3,126)=11.66, p<.01$)であり、有意傾向だったのは「カールは自動車の鍵をなくした」($F(3,124)=2.26, p<.10$)、「カールはビデオを借りた」($F(3,126)=2.17, p<.10$)、「カールは病気になった」($F(3,126)=2.29, p<.10$)であった。多重比較(HSD法)の結果は次のようになった。「カールは自動車で出かけた」では、条件1, 条件2, 条件3の間に差はなく、条件4が他の3条件よりも小さかった。「カールは自動車を運転した」では、条件2が条件4より大きかった以外は、条件間の差はなかった。

表2 ある出来事があったと思われる程度

(4:絶対にあった 3:多分あった 2:多分なかった 1:絶対になかった)

材料1

	条件1 [(1A) → (1B) → (1C) → (1D)] (32人)						条件2 [(1A) → (1B) → (1D)] (33人)						条件3 [(1A) → (1C) → (1D)] (32人)						条件4 [(1A) → (1D)] (33人)						分散 分析 結果
	1	2	3	4	平均	SD	1	2	3	4	平均	SD	1	2	3	4	平均	SD	1	2	3	4	平均	SD	
1 カールは自動車で出かけた	1	0	6	25	3.72	0.62	2	0	5	26	3.67	0.77	0	2	6	24	3.69	0.58	1	1	21	10	3.21	0.64	**
2 カールは自動車の鍵をなくした	22	8	0	0	1.27	0.44	23	10	0	0	1.30	0.46	17	15	0	0	1.47	0.50	16	16	1	0	1.55	0.56	*
3 カールは自動車を運転した	3	0	4	25	3.59	0.90	1	0	5	27	3.76	0.60	0	3	9	20	3.53	0.66	0	0	23	9	3.28	0.45	*
4 カールは浴室に巻き込まれた	17	10	4	1	1.66	0.81	7	24	2	0	1.85	0.50	9	19	4	0	1.84	0.62	5	24	3	1	2.00	0.60	ns
5 カールは約束に遅れそうになった	14	13	5	0	1.72	0.72	7	22	4	0	1.91	0.57	4	13	14	1	2.38	0.74	3	16	13	1	2.36	0.69	**
6 カールはデートをキャンセルされた	15	14	3	0	1.63	0.65	7	23	2	1	1.91	0.62	10	22	0	0	1.69	0.46	9	19	5	0	1.88	0.64	ns
7 カールは友人たちと遊んだ	5	10	13	4	2.50	0.90	3	10	14	6	2.70	0.87	5	5	18	3	2.61	0.87	2	11	15	5	2.70	0.80	ns
8 カールは飲酒運転をしないよう注意された	0	0	0	32	4.00	0.00	0	0	0	33	4.00	0.00	1	0	1	30	3.88	0.54	0	1	2	30	3.88	0.41	ns
9 カールはビデオを借りた	18	13	1	0	1.47	0.56	11	22	0	0	1.67	0.47	10	21	1	0	1.72	0.51	9	22	2	0	1.79	0.54	+
10 カールはビデオをみた	18	14	0	0	1.44	0.50	13	19	1	0	1.64	0.54	10	20	2	0	1.75	0.56	9	21	3	0	1.82	0.57	*
11 カールはビールを買った	0	4	12	16	3.38	0.70	1	1	13	18	3.45	0.70	2	8	19	3	2.72	0.72	2	6	22	3	2.79	0.69	**
12 カールはビールを飲んだ	0	1	0	31	3.94	0.35	0	0	1	32	3.97	0.17	0	8	16	8	3.00	0.71	1	0	26	6	3.12	0.54	**
13 カールはおつりをごまかそうとした	17	12	2	1	1.59	0.74	16	17	0	0	1.52	0.50	10	21	1	0	1.72	0.51	12	20	1	0	1.67	0.53	ns
14 カールはコンビニエンスストアに入った	5	10	16	1	2.41	0.78	4	11	16	2	2.48	0.78	6	17	8	1	2.13	0.74	3	16	11	3	2.42	0.78	ns
15 カールは自動車事故を起こした	0	0	7	25	3.78	0.41	0	1	13	18	3.53	0.56	0	2	7	23	3.66	0.59	1	0	24	8	3.18	0.57	**
16 カールは飲酒運転をした	0	1	3	28	3.64	0.44	0	0	5	28	3.85	0.36	1	2	14	15	3.34	0.73	0	0	24	9	3.27	0.45	**
17 カールは風呂運転をした	4	11	11	6	2.59	0.93	1	14	12	6	2.70	0.80	4	15	11	2	2.34	0.77	3	13	15	2	2.48	0.74	ns
18 カールは病気になった	17	13	1	1	1.56	0.70	15	17	1	0	1.58	0.55	16	15	1	0	1.53	0.56	8	21	4	0	1.88	0.59	+
19 カールは大げなをした	7	6	8	11	2.72	1.15	5	6	12	10	2.82	1.03	8	7	6	11	2.64	1.19	5	9	12	7	2.64	0.98	ns
20 カールはくなくなった	0	0	2	30	3.94	0.24	0	0	1	32	3.97	0.17	0	0	2	30	3.94	0.24	0	0	5	28	3.85	0.36	ns

** <.01 * <.05 + <.10 ns >.10

材料2

	条件1 [(2A) → (2B) → (2C) → (2D)] (35人)						条件2 [(2A) → (2B) → (2D)] (31人)						条件3 [(2A) → (2C) → (2D)] (34人)						条件4 [(2A) → (2D)] (32人)						分散 分析 結果
	1	2	3	4	平均	SD	1	2	3	4	平均	SD	1	2	3	4	平均	SD	1	2	3	4	平均	SD	
1 先生は学校の廊下を歩いていた	0	0	5	30	3.86	0.35	0	0	4	27	3.87	0.34	0	0	1	33	3.97	0.17	0	0	4	25	3.86	0.34	ns
2 先生は教筆を出した	18	12	4	0	1.59	0.69	8	15	4	1	1.93	0.75	13	15	4	1	1.79	0.77	3	16	9	1	2.28	0.69	**
3 先生は職員室を出た	8	3	16	7	2.65	1.05	1	6	19	4	2.87	0.67	4	7	18	4	2.67	0.84	0	5	17	6	3.04	0.63	ns
4 先生は教室に着いた	1	1	9	24	3.60	0.68	1	3	12	14	3.30	0.78	0	0	15	19	3.56	0.50	1	7	13	7	2.93	0.80	**
5 先生は職員室に着いた	18	14	2	1	1.60	0.73	15	12	4	0	1.65	0.70	8	17	9	0	2.03	0.71	4	20	4	1	2.07	0.64	**
6 先生は同僚と立ち話をした	12	18	4	1	1.83	0.74	8	17	6	0	1.94	0.67	12	19	3	0	1.74	0.61	10	15	4	0	1.79	0.66	ns
7 生徒が先生に挨拶をした	13	14	8	0	1.86	0.76	9	15	6	1	1.97	0.78	12	14	8	0	1.88	0.76	8	16	5	0	1.90	0.66	ns
8 先生は扉を開けた	1	0	6	28	3.74	0.60	1	2	11	17	3.42	0.75	0	0	3	31	3.91	0.28	2	3	11	13	3.21	0.89	**
9 黒板消しが扉にはさまっていた	1	0	14	20	3.51	0.65	0	3	13	15	3.39	0.66	0	0	11	22	3.67	0.47	1	3	10	15	3.34	0.80	ns
10 黒板消しが先生の顔に落ちてきた	1	3	22	9	3.11	0.67	1	5	17	8	3.03	0.74	0	5	17	12	3.21	0.68	0	5	12	12	3.24	0.73	ns
11 先生は真っ白になった	3	6	20	5	2.79	0.80	4	5	19	3	2.68	0.82	1	7	20	6	2.91	0.70	1	9	14	5	2.79	0.76	ns
12 先生はうまく選んだ	5	18	11	1	2.23	0.72	6	17	7	1	2.10	0.73	3	19	12	0	2.26	0.61	2	18	8	1	2.28	0.64	ns
13 先生は生徒を移した	3	13	11	8	2.69	0.92	1	12	14	4	2.68	0.74	1	12	19	2	2.65	0.64	1	10	13	5	2.76	0.77	ns
14 先生は笑ってごまかした	6	15	14	0	2.23	0.72	6	17	7	1	2.10	0.73	1	16	17	0	2.47	0.55	3	15	10	1	2.31	0.70	ns
15 生徒は先生を笑った	3	3	17	12	3.09	0.87	3	3	16	9	3.00	0.88	1	6	20	7	2.97	0.71	2	6	11	10	3.00	0.91	ns
16 生徒は先生に謝った	6	19	9	1	2.14	0.72	7	15	9	0	2.06	0.72	5	17	11	1	2.24	0.73	4	14	10	1	2.28	0.74	ns
17 生徒は先生を助めた	10	17	7	1	1.97	0.77	10	17	4	0	1.81	0.64	11	19	4	0	1.79	0.63	8	15	5	1	1.97	0.76	ns
18 先生はイタズラをしたのは生徒だった	1	2	20	12	3.23	0.68	2	2	17	10	3.13	0.79	0	3	22	9	3.18	0.57	0	7	13	9	3.07	0.74	ns
19 先生は生徒に好かれている	4	24	7	0	2.09	0.55	7	18	5	1	2.00	0.72	3	21	7	3	2.29	0.75	3	16	8	2	2.31	0.75	ns
20 先生は1年3組の担任である	3	10	16	6	2.71	0.85	2	7	18	4	2.77	0.75	1	23	10	0	2.26	0.50	2	18	6	3	2.34	0.76	**

** <.01 * <.05 + <.10 ns >.10

「カールは約束に遅れそうになった」では、条件1、条件2よりも条件3、条件4が大きく、条件1と条件2、条件3と条件4の間に差はなかった。「カールはビデオをみた」では、条件4が条件1より大きかった以外は、差はなかった。「カールはビールを買った」では、条件1、条件2は条件3、条件4より大きかった。「カールはビールを飲んだ」では、条件1、条件2は条件3、条件4より大きかった。「カールは自動車事故を起こした」では、条件1と条件3が条件4より大きかった。「カールは飲酒運転をした」条件1、条件2は条件3、条件4より大きかった。有意傾向であった「カールは自動車の鍵をなくした」、「カールはビデオを借りた」、「カールは病気になった」においては、すべて差はなかった。

材料2において、条件間で有意差があったのは、「先生は教室を出た」(F(3,120)=4.76,p<.01),「先生は教室に着いた」(F(3,123)=5.83,p<.01),「先生は職員室に着いた」(F(3,125)=3.96,p<.01),「先生は扉を開けた」(F(3,125)=7.10,p<.01),「先生は1年3組の担任である」(F(3,125)=3.95,p<.01)であった。多重比較(HSD法)の結果は次のようになった。「先生

は教室を出た」では、条件4が条件1より大きかった。「先生は教室に着いた」では条件1と条件3が条件4より大きかった。「先生は職員室に着いた」では条件4が条件1より大きかった。「先生は扉を開けた」では、条件1と条件3が条件4より大きく、条件3は条件2より大きかった。「先生は1年3組の担任である」では、条件2が条件3より大きかった。

【マンガらしさ】

各材料の各条件についての「マンガらしさ」を尋ねた結果を表3に示す。 χ^2 検定を行ったところ、どちらの材料でも条件による回答の偏りは有意ではなかった（材料1 $\chi^2(9)=13.85$, ns；材料2 $\chi^2(9)=3.85$, ns）。マンガらしさの判断理由としては、「マンガである」「どちらかといえばマンガである」では、コマ、絵、ことば（オノマトペ含む）の存在や、ストーリー（展開）があることをあげている場合が多かった。「マンガでない」「どちらかといえばマンガでない」では、現実との比較（材料1では「現実によくあること」、材料2では「現実にはこのようなことはない」）や、ストーリー・オチがないことがあげられていた。

考察

どちらの材料においても、条件による「マンガらしさ」の判断に差はなく、本調査で用いられた画像の連なりが、ほとんどの対象者によって「マンガである」と認識されていたといえる。そして、その判断の根拠の1つとして、ストーリーがあることがあげられている。では、画像の連なりから、読者はどのような“物語”を読み取ったのであろうか。

本調査では、読み手がどのようなことが起こったと捉えているのかを検討するため、各材料において20の出来事をあげ、その「あったと思われる程度」の判断を求めた。まずは、材料ごとに検討する。

材料1において、条件によってに差があったのは、「カールは自動車で出かけた」、「カールは自動車を運転した」、「カールは約束に遅れそうになった」、「カールはビデオをみた」、「カールはビールを買った」、「カールはビールを飲んだ」、「カールは自動車事故を起こした」、「カールは飲酒運転をした」であった。

予備調査では、材料1の内容として多く答えられたのは「飲酒運転をしないように注意されたのに飲酒運転をしてしまい、事故を起こして死亡した」であったが、これに含まれる出来事のうち、「カールは自動車事故を起こした」、「カールは飲酒運転をした」で条件間の差があり、前者では条件4が低く、後者では条件1、条件2より条件3、条件4が低かった。これは、条件による呈示画像の違いが、出来事が「あったと思われる程度」に影響を与えていると考えられる。条件3ではカールがビールを飲みながらハンドルを握っている〈1B〉が、条件4では〈1B〉に加えて自動車の事故の様子が描かれている〈1C〉が呈示されていない。つまり、画像として明示されていない出来事は「あったと思われる程度」が低くなるのである。

表3 「マンガである」程度

材料1 (人)

	マンガである	どちらかといえば マンガである	どちらかといえば マンガでない	マンガでない
条件1	18	8	1	5
条件2	14	10	7	1
条件3	13	10	5	2
条件4	13	13	7	0

材料2 (人)

	マンガである	どちらかといえば マンガである	どちらかといえば マンガでない	マンガでない
条件1	19	12	2	1
条件2	14	14	1	2
条件3	16	15	2	1
条件4	12	13	1	3

一方で、明示されている出来事は「あったと思われる程度」が高くなる。予備調査で得られた内容のうち、「カールは飲酒運転をしないよう注意された」、「カールは亡くなった」はどの条件においても平均値が極めて高く、条件間で差はなかった。この2つの出来事は〈1A〉と〈1D〉の画像と対応しており、どの条件においても明示されていたためであろう。とはいえ、「カールは自動車事故を起こした」、「カールは飲酒運転をした」の2つの出来事においても、すべての条件で平均値は3を超えており、明示されていないことであっても、十分推測可能であるともいえる。また、予備調査の回答にはみられない内容で条件間に差があったのは「カールは約束に遅れそうになった」であった。どの条件においても平均値は高くないが、条件3、条件4では、飲酒場面が明示されていないため、自動車事故やカールの死の原因を他のこと（急いだ）に求めたのではないかと考えられる。

材料2において、条件によって差があったのは、「先生は教室を出た」、「先生は教室に着いた」、「先生は職員室に着いた」、「先生は扉を開けた」、「先生は1年3組の担任である」であった。

予備調査で得られた材料2の内容は、「教員が1年3組の教室に入ったときに、上から黒板消しが落ちてきた」であったが、上記の条件による差があった出来事は、この内容に含まれていない。画像で明示されているのは、〈2C〉の「先生は扉を開けた」だけであり、〈2C〉が含まれる条件1と条件3は、他の条件よりも平均値が高くなっている。同時に〈2C〉は「先生は教室に着いた」ことを示しているともいえるが、「先生は扉を開けた」と同様、条件1と条件3の平均値が他より高い。〈2B〉「『1年3組』と書かれている室名札」でも「先生は教室に着いた」ことを示せると思われるが、より直接的な〈2C〉が含まれている条件の方が、より「あったと思われる」ようである。これ以外に画像で直接描かれている出来事は、「先生は学校の廊下を歩いていた」（〈2A〉）、「黒板消しが先生の頭に落ちてきた」（〈2D〉）であり、この2枚の画像はすべての条件で呈示されている。これらの出来事は、条件間での「あったと思われる程度」に

差はなかったが、すべての条件で平均値が3以上と高かった。「黒板消しが先生の頭に落ちてきた」に関連すると考えられる出来事として「黒板消しが扉にはさまっていた」がある。この出来事の「あったと思われる程度」もすべての条件で3以上と高い。落ちてくる前の黒板消しについて明示的な描写はないが、落ちてくる前の黒板消しの状態について推論したものと考えられる。

以上のことから、複数の画像、すなわちコマが連なっているとき、読み手はそれをひとつながりのものとして読むことが改めて確認できた。そこで読み取る内容は、コマに明示的に描かれているものはもちろんだが、直接描かれていないものの複数のコマを関連づけてはじめて解釈されるものも含まれる。例えば、〈1C〉には自動車を運転している者の情報はなく、〈1A〉と関連づけることによって、カールが自動車を運転していたということがわかる。材料1の条件4では、明示されているのは「カールが飲酒運転をしないように注意された」と「カールの墓」のみであるにも関わらず、「カールが飲酒運転をして事故を起こし死亡した」ことを読み取ることができる。ここでこのような解釈を導くための手がかりは、〈1A〉中の「飲酒運転」ということば、飲酒運転は重大事故を引き起こしやすいという事実に関する知識、墓を示すことでその人の死を表すという表現上の知識であると考えられる。さらには、グライスの関係の公準や、呈示されているもので話を完結させたいという読み手の欲求も関係していよう。同様のことは材料2についてもいえる。材料2は、予備調査の結果からわかるように時間の経過は表されているものの、「マンガらしさ」の評定理由にみられるようにいわゆる「オチ」がない。また、場面、場面を切り取ったような画像からなっている。それでも、条件4であってさえ、「黒板消しが先生の頭の上に落ちてきた」ことを読み取っている。ここには、「黒板消しトラップ」（自由記述より）に関する知識も働いていよう。

こうしたことは、文章理解における橋渡し推論にあたるものであると考えられる。すなわち、話の筋を通し（一貫性）、理解するために、欠けている情報を補うものである。

一方で、文章理解における精緻化推論にあたるものも行われている。例えば、材料1ではカールの行動、材料2では先生と生徒の関係など、“核となる出来事”を理解するには必要ないが、読み手を豊かにするような推論である。そうした周辺情報についても「あったと思われる」程度に強弱があるのは、読み手もっている様々な知識によるものだろう。

おわりに

マンガの読解時に、読み手はコマとコマとの連なりからどのようなことを読み取るのかについて、呈示するコマの数や内容を変えて検討した。その結果、明示されている情報や様々な知識にもとづき、“描かれていない”ことまで読み取れることが明らかになった。つまり、読み手はコマとコマとをつなげて、一貫した物語を読みとろうとしているといえる。これらは、文章理解における橋渡し推論、精緻化推論にあたるものと考えられることができるだろう。

本稿では分析の対象としなかったが、同時に行った調査対象者のマンガに対する経験を尋ねる調査のなかで、対象者から「最近、スマホ等で読むので、『冊数』という概念が希薄（というか、何冊読んだかがわからない。何話という数え方になる）」、「アプリにもよるが画面という概念も薄れつつあるように思う」、「最初から電子化されることを想定している作家の場合、コマがタテにずらずら並んでいる」といった意見が寄せられた。筆者もいわゆるマンガアプリを利用しているが、確かに紙の冊子媒体とは異なる見方をしている実感がある。今後、電子媒体でのマンガがより普及していくことにより、読み手の読み方、作り手の作り方も変わっていくかもしれない。しかし、そうした中でも、マンガがコマから構成されている限り、コマとコマとをつないで物語を紡ぐという作業には変わりがないだろう。

私たちは“ない”ものを読める。“ない”ものをどこまで深く読むかが、マンガに限らず、物語を受け取る時の楽しみにつながるのではないだろうか。

引用文献

- 石子順造（1989）．マンガ表現の論理と構造竹内オサム・村上知彦（編）マンガ批評大系3描く・読む・売る平凡社
- 村上知彦（1989）．情報誌的世界のなりたち思想の科学社
- 中澤潤・中澤小百合（1993）．漫画読解力の発達.漫画がわかるとは何か？.子どもと漫画.「漫画読解力」はどう発達するか.現代児童文化研究会
- 中澤潤（2004）．マンガ読解力の規定因としてのマンガ読みリテラシーマンガ研究 vol.5.
- 夏目房之助（1995）．「間白」という主張する無.コマの隙間には「時間」が詰まっている！.別冊宝島 EXマンガの読み方（pp.184-195）宝島社
- 吉田佐治子（2016）．マンガを読むには何が必要か摂南大学教育学研究, 12, 1-16.